

令和3年度 学校経営ビジョン

亀山市立井田川小学校

I 学校教育目標

生き生き 笑顔で つながって

～自ら学び つながり 心豊かにたくましく生きる 井田川っ子の育成～

II めざすビジョン

<めざす子ども像>

**自己実現のために、自ら進んで意欲的に
学習や生活をする子ども**

- ・ 学び合い、想いを伝え合う子ども
- ・ 認め合い、励まし合い、思いやりのある子ども
- ・ 命を大切に、健康で明るい子ども
- ・ 決まりやルールを守り、ねばり強く最後までやりぬく子ども
- ・ 地域のよさを感じ、未来に向けたたくましく生きる子ども

<めざす教職員像>

学びの充実を通し、未来を創造する教職員

- ・ 子どもの想いに寄り添い、共に生きる教職員
- ・ 指導力向上を目指し、意欲的に取り組む教職員
- ・ 保護者・地域と積極的に関わり、信頼関係を築いていこうとする教職員
- ・ 組織としての意識を持ち、責任感・助け合いのある教職員
- ・ 効率的な業務遂行を心がけ、勤務時間縮減に努める教職員（月45h以内、年360h以内を目指す）



<めざす学校像>

あいさつで、笑顔があふれる学校

- ・ 子どもたちが主体的に学び活動する学校
- ・ 一人ひとりの子どもが大切にされる学校
- ・ よろこびを明日につなげる学校
- ・ 職員が働く喜びを感じる学校
- ・ 「地域とともにある学校づくり」をすすめる学校

III 重点目標

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたカリキュラムマネジメントの推進と授業改善
- (2) 部落差別をはじめとする様々な差別に気づき、解消に向け行動する実践力を育成します。
- (3) 人権を尊重し、仲間とともにつながり合い、高まり合う仲間づくりを進めます。
- (4) 個性を尊重し、社会性の基礎を培う適切な指導・必要な支援を進めます。
- (5) 家庭・地域と連携し、健康の増進や体力の向上を図る教育活動を進めます。
- (6) 学校運営協議会を核にして、保護者や地域とともに、井田川地区のよさを活かした「地域とともにある学校づくり」を進めます。
- (7) 教職員の同僚性を高め、働きやすい職場環境づくりを進めます。

IV 令和3年度キャッチフレーズ（合言葉）

進んでチャレンジ 笑顔いっぱい 井田川っ子

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」） の視点からの授業改善について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【対話的な学び】の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。



【深い学び】の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

1

学習のめあて(課題の提示)～調べ学習(情報収集)～個別学習・思考(情報処理)～グループ学習(情報発信+協働学習)～グループまとめ(コンセンサスの醸成・思考の深化)～発表・プレゼンテーション(情報発信)～感想・意見交換(評価)～再検討。これは、一般社会で利用されている「PDCA サイクル」と同様の流れだ。「PDCA サイクル」というのは、Plan(計画)・Do(実行)・Check(評価)・Action(改善)を繰り返すことによって業務改善を推進する手法。しかし、「主体的・対話的で深い学び」で目指すのは「業務改善能力」ではなく「課題解決能力」の育成だ。答の決まっていない課題、経験したことのない未知の事象にも対応できる「課題解決能力」。課題を見つけ出し、チームで協働して解決する力の育成だ。もちろん、この「主体的・対話的で深い学び」は小学校で始まり、中学～高校と発展・深化して行く。そして、高校の新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」は英語でも求められている。日本の高校の授業で、高校生たちが英語でディスカッションし、英語でプレゼンテーションし合う姿

を想像するとワクワクしてくる。

もちろん、学習指導要領が示すとおり「主体的・対話的で深い学び」は、ひとつの定型で行われるのではなく、遍く、そして細部に亘って実践されるものだろう。そのあたりは是非、教育現場での実践を期待したい。こんなことをしている、こういうやり方があるという先生方のレポートをお待ちしています。(編集長：山口時雄)